

Title	歴史と伝統そして未来へ
Author(s)	後藤, 多津子
Journal	歯科学報, 117(3): 3i-3i
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/4290">http://hdl.handle.net/10130/4290</a>
Right	
Description	



## 歴史と伝統そして未来へ

後 藤 多津子

毎日が闘いのような5年あまりの香港大学歯学部での教員生活を経て、東京歯科大学に赴任して1年8ヶ月が経ちました。故郷の福岡を離れ、先に東京で一人暮らしをしていた大学生の子供たちと、期せずして再び東京で一緒に住むことになりました。東京のイメージは人それぞれあると思いますが、私にとっては本好きだった父の影響もあり、地方にはなかなか見られない古本屋街は憧れでした。今、まさに水道橋校舎の近くは私の憧れの地であり、水道橋、神保町、神田と続く文学と歴史の街は私にとってまさに「東京」であり、5年前に他界した父が生きていたら、一緒に古本屋を見て回りたかったといつも思います。

古き良き「知」を感じさせるこの地のすぐ近くに明治時代よりその居を構える東京歯科大学が、高山紀齋先生や血脇守之助先生らの教えを受け継ぎ、歯科界に多くの人材を育ててきたことは誰もが認めるどころです。私は、東京歯科大学に来て、教育の教材にこめられたその人材育成の精神に気づきました。学生時代から使っていた教科書や勉強資料、教員となってから講義に使っていた「わかりやすい」から使っていた画像、言語聴覚士の教育のために探し当てた「一番わかりやすい」嚙下のビデオなど、多くは東京歯科大学の先生が作られたものでした。「知りたいことがこれに載っていなかったらあきらめがつく」と海外へも持ち歩いた解剖の本、「これは素晴らしい！香港大学の学生のために、英訳版はないですか？」と日本へ電話をかけた教科書…改めて見返すといずれも東京歯科大学発です。東京歯科大学にいるとあたりまえなのかもしれませんが、私は至る所で東京歯科大学の日本全国における歯科医学教育に対する貢献を感じずにはられません。

私は、東京歯科大学歯科放射線学講座教授を拝命しておりますが、日本の歯科放射線学の歴史も東京歯科大学の歴史の中に見ることができます。歯科放射線学としての、わが国初の歯科エックス線に関する記録は、1897年(明治30年)3月発行の東京歯科大学発刊の歯科学報の前身である『歯科医学叢談』誌の第7号に掲載された、野口英世(ペンネーム湖柳生)による『るよんとげん X 光線ヲ応用シテ欠歯ヲ発見セシ一例』と言われています。子供のころ、伝記でしか知ることのなかった野口英世先生に少し近づいた感じがして、また新たな感激に浸っています。

レントゲン博士が発見し、野口英世先生が歯科エックス線の記録をしたためた19世紀から、今は21世紀へと歴史は動いてきました。医学の発展において診断技術の発展が果たしてきた役割はとても大きく、X線は1901年、核医学は1903年、CTは1979年、MRIは2003年にそれぞれの開発者はノーベル賞を受賞しています。私は東京歯科大学で、先輩方が築いて来られた歴史と伝統を礎として歯科放射線診断学の素晴らしさを学生さん達に伝えていこうと思っています。彼らがこの歴史ある地で学べることに誇りを持ち、そして未来へはばたけるよう、楽しく学べる最善の環境を整えていけたらと思います。

(東京歯科大学歯科放射線学講座 教授)